

さらばオカルト・ブーム

井上 順 孝

(昭和 48 年修士修了)

昨年、某女子大の学生が、提出レポートの中で『幻魔大戦』のことについてやたらと詳しく書いていた。ずいぶんなファンなのだそうである。あんまり幻魔大戦のことばかり話題にするので彼氏に嫌われそうで心配だ、などということまで書いてあった。幻魔大戦というのは平井和正という SF 作家が、GLA という教団の教祖をモデルにしながら、シリーズで出しているベストセラーである。どうも若者の間にかかなりの影響をもっているらしい。そんなこともあって、今年の講義の始めにアンケートをとってみた。学生の宗教意識などを調べる項目の終わりに、幻魔大戦を読んだことがあるかどうかという質問項目をはさんでおいた。どれくらいの学生が、この本を読んでいるのか調べてみようと思ったのである。

三つのクラスから四百近いサンプルが集まった。大体読んだ経験があるという学生は 5 パーセントである。一つの書を二十人に一人の学生が読むということはどう評価したらいいのか、その辺のことは分からないが、これだけ書籍があふれている時代にしては多い方ではないかと思った。興味をもったのは、こうした類のことが急速に若者の関

心を呼んでいるということである。

かつてエクソシストとかヘルハウスといった、いわゆるオカルト映画がはやったことがある。その頃は、何かちょっとした恐怖映画のブームであると感じていたのであるが、その後「こっくりさん」とか、念写とか、念力とかいうものが流行し、若者の意識がだいぶ変わってきたなと思うようになった。さらに最近は密教ブームだそうである。桐山密教とやらが、宣伝のうまさもあるが、注目を集めている。

こうした現象は、一過性のものと考えられることもできよう。似たような現象は大正時代にもあったという。大本教や心霊協会が関心と呼んだ頃である。心霊現象は大いに話題になったようだ。そのブームの再来と考えていいのかもしれない。そういえば大本教、とくに出口王仁三郎の思想が最近注目を集めているようだし、井上円了の『妖怪学』という本が復刊されている。

神秘的なものが関心と呼ぶ時代なのだと解釈してもよいだろう。しかし、時々、オカルト現象に科学以上の期待をもっている学生に出会ったりすると、少し不安な気になる。自分自身は宗教学を

専攻しているのであるから、神秘的、あるいはオカルト的現象にも、多角的な視点をもって対処しなければならないと思う。口寄せ、神憑り、心霊現象といった、どちらかというとなん科学的とされるようなものに対しても、その解釈には柔軟でなければならないであろう。だがどうも最近のオカルト・ブームには危なかしさを感じる。

合理的思考を身につけた上で、なお、その合理性なるものに疑いを抱くというプロセスではないようである。最初から不思議な現象に魅せられているという気がするのである。死後の問題と死の問題は、宗教にとって、いや人間にとって、恐らく永遠の問題であろう。このことに対する関心は決してなくならないと思う。異質な世界とのコミュニケーションを求めて、さまざまな新しい工夫がなされるであろう。これまでは、ことごとく失敗してきたけれどもである。

もっとも、呪術的あるいはオカルト的行為や現象に関心を持つ若者たちはそんなに真剣ではないのかもしれない。あちこちから手招きしている、いろんな遊び方的一种なのかもしれない。彼らの思考の特質は「誤った観念連合」ではなくて、「観念連合の遊び」なのかもしれない。中学生のときコックリさんに興じたのも遊びで、高校や大学の受験前に神社で絵馬を奉納するのも遊びで、法力で護摩の火をつけるのを見に行くのも遊びとなれば、まあ、勝手にやって下さいということになる。宗教学者の研究対象が増えたと喜ばばいいのである。

もっとも不快なのは、神秘的な世界などであろう筈もないと思っているのに、こうしたブームに悪のりする研究者である。神秘的なことがらは世に満ちていよう。その理解には理性だけでは不十分で、感性や直接的体験も必要と思う。だが、そうして把握したものを説明する段階では、どうしたって論理的叙述をベースにせねばならない。その辺の厳しさがすっぱり抜けているような気がする。工学博士などの肩書きを利用しながら、いささか軽薄に神秘的現象、オカルト的現象の解説に及ん

でいる輩を目にする度に思い出す一つの事件がある。

それはもう十年以上前の新聞記事のことである。記憶が怪しくなっている部分もあるが、肝要な点ははっきりと覚えている。多分小学生だったと思う。突然の自殺をした。しかし、それは成績を苦にしてとか、親に叱られてとかいう類の理由からではない。彼は死の世界があるかどうか、霊とのコミュニケーションが可能かどうかを、自分の命を材料に実験したのであった。死の前に彼は遺書を書き、誰にも知られぬ場所にこれを埋めた。そして自殺の前に新聞社に手紙を送った。自殺の理由についてである。死者の霊と話ができると称する人に自分を呼び出してくれるよう呼びかけて欲しいというのである。彼とコンタクトできたという証拠は、彼が人知れず埋めた遺書を発見することである。

この記事はだいぶ大きく報道されたけれども、その後、誰かがその遺書を発見したという記事を見ない。これに挑戦する自信のある霊能者はいなかったと見える。挑戦した人はいたかもしれないが、成功した人はいなかったということかもしれない。それは、しかしどうでもいい。どうして誰も発見できなかったかについて説明が必要となれば、たちどころにしたり顔でやる人はごまんといるであろうから。ともかく、この少年のといった態度がいたく私の心を刺激したのである。こういうのが科学的精神のきわみなかもしれない。少しラディカル過ぎる方法ではあるが。

死後の世界とか、霊の世界は目下のところ、多くの人が納得のいくような形では確かめようがない現象である。それゆえ、一層神秘性が増し、マーク・シート方式の解答に飽きた若者が熱中する一因となるかもしれない。その上へまた、宗教研究者と称する論理の飛躍に得意な連中がのっかっている。ひたすらレトリックを駆使しての、神秘現象やオカルト現象の解釈にはそろそろうんざりというところである。